

# 2021-22 年度レギュラーコースカリキュラム報告

## —アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—

秋 澤 委太郎

### 1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、①10カ月間にわたるレギュラーコース、②夏期集中コース、③夏期漢文コースの3種類の集中日本語教育が行われている。本稿は①のレギュラーコースについて報告するものであり、他については[橋本ほか \(2022\)](#)と[大竹 \(2022\)](#)を参照されたい。

レギュラーコースの期間は2021年9月6日から2022年6月10日までの40週間で、学生数は51名（うち博士課程13名修士課程14名その他24名）、指導にあたった教員は常勤教員8名、非常勤教員9名であった。

### 2 レギュラーコースの概要

40週間のレギュラーコースは4学期に分かれており、各学期の間には休みがある。今年度の第1学期は9月6日から10月29日までの8週間、第2学期は11月8日から12月23日の7週間、第3学期は1月17日から3月11日までの8週間、第4学期は3月28日から6月10日までの11週間で実施された。第1学期と第2学期を「前期」、第3学期と第4学期を「後期」と呼んでいる。前期は主に日本語の構造や知識の習得に比重がおかれ、後期は各学生の専門や関心領域に近い内容に焦点をあてた科目を選択することが可能になるという点に違いがある。

毎日の授業は午前と午後に分かれており、午前の授業は文法など言語の形式面を重視し、午後の授業は聴解、読解、発話等の総合的な言語の運用力を高めることを目的としている<sup>1</sup>。そのため、「前期」にあたる第1学期の午前は「文法」「待遇表現」、午後は「総合運用Ⅰ」という科目が設定され、第2学期の午前は「接続表現」「統合日本語Ⅰ」、午後は「総合運用Ⅱ」が実施される。ここまでは全学生共通である。「後期」にあたる第3学期は、午前は「統合日本語Ⅱ」が共通であるが、「選択A」「選択B」そして午後の「総合運用Ⅲ」は各学生が自分の関心領域に合わせて科目を選択することが可能である。さらに第4学期の午前は第3学期と同じコースが設定され、午後は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語文法強化クラス」のいずれか希望するものを一つ選択することができる。第3・第4学期には、随意に履修できる文語文法等のオプション授業も用意されている（「選択C」）。

## 2021-2022年度 40週間のレギュラーコース日程

週	8:00-8:25 1限 非同期授業	8:30-10:10 2~3限 クラス授業	10:30-11:50 4限 クラス授業	
			水・金 4限は個別指導/談話室など	
1	オリエンテーション・試験・面談		オリエンテーション・面談など	↑
2	文法 Japanese Grammar		総合運用 I Applied Japanese Skills I  個別指導/談話室 (水・金曜)	
3				
4				1学期
5				9/6-10/29
6				8週間
7	待遇表現			
8	Formal Expressions			↓
9	秋休み 1週間 10月30日(土)~11月7日(日)			
10	接続表現		総合運用 II	↑
11	Conjunctive Expressions		Applied Japanese Skills II  個別指導/談話室 (水・金曜)	
12	統合日本語 I IJ: Integrated Japanese Advanced Course I			2学期
13				11/8-12/23
14				7週間
15				
16				↓
17-19	冬休み 3週間 12月24日(金)~1月16日(日)			
20	統合 日本語 II IJ II	選択 A Elective Course A	選択 B	↑
21				
22				総合運用 III
23				Applied Japanese Skills III
24				3学期
25				1/17-3/11
26				8週間
27	個別指導/談話室 (金曜)			
			個人面談	↓
28-29	春休み 2週間 3月12日(土)~3月27日(日)			
30	統合 日本語 III IJ III	選 択 A	選 択 B	↑
31				
32				
33				4学期
34				3/28-6/10
			プロジェクトワーク/ グループ学習/クラス授業/ 選択 C Project Work/Study in Group/ Class/Elective C	
35	GW 休み 1週間 4月29日(金)~5月5日(木)			
36	統合 日本語 III IJ III	選択 A	B	授業は実質
37				プロジェクトワークなど
38				
39	試験5/30月、発表準備		試験5/30月、発表準備	
40	発表6/6・7月火、面談6/10金		発表6/6・7月火、面談6/10金	↓

### 3 今年度の特殊事情

上掲の日程表は基本的に例年と同様であるが、今年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため第1学期から第4学期までほぼすべての教育活動をオンラインで行った。当初の計画では、第1学期はオンラインで行い、以後可能な限り早期の対面教育再開を目指していたが、残念ながら長引く感染症禍がそれを許さなかった。3月に多くの学生の来日は叶ったものの、対面での活動は第4学期に授業以外の形で限定的に施行するにとどまった。学生の来日に際しては、急遽授業予定等の変更が発生した。

ほぼ完全オンラインとなった教育体制は、昨年施行したものを踏襲しつつ、その経験を参考に改善を図った。限定的な対面活動を含め、以下に詳細を述べる。学生来日の経緯とそれに伴う授業計画の変更についても、カリキュラムに影響を与えたものとして記録しておく。

#### 3-1 オンライン教育のために利用したサービス

授業や学生との面談、そして発表会や講演会などのイベントは、Zoom<sup>2</sup>のミーティングプラットフォーム上で行った。年度開始時と終了時の実力試験(9-1-1参照)にはGoogleフォーム<sup>3</sup>とQuilgo<sup>4</sup>を併用した。「教員室」(教職員のための交流スペース)と「談話室」(3-2-2参照)にはRemo<sup>5</sup>とGather<sup>6</sup>を用いた。

学生への連絡事項や授業・イベントスケジュールの提示、そして課題の指示・提出・採点のためにはGoogle Classroom<sup>7</sup>を採用した。全体的な連絡には「連絡掲示板」クラスルーム<sup>8</sup>を、そして各クラスごとに1つのクラスルームを設置した<sup>9</sup>。漢字学習プログラムSKIP(9-2参照)、実力試験、「談話室」、そして第4学期に行われた対面活動(3-5参照)もそれぞれのクラスルームを用いて運営された。

教職員同士の日々のやりとりにはSlack<sup>10</sup>を利用した。Slackは、本校スタンフォードオフィス<sup>11</sup>が学生同士の交流の場を提供するためにも用いられた。

#### 3-2 毎日の授業スケジュール

昨年度と同様、時差の大きい遠隔地からも学生が参加できるように、そして日本在住の学生・教職員にも負担になりすぎないように授業スケジュールを設定した。具体的な時間割は以下の通りである。

- 1限：8:00 – 8:25 非同期的授業  
(5分休憩)
- 2限：8:30 – 9:15 通常授業  
(10分休憩)

3限：9:25 – 10:10 通常授業

(20分休憩)

4限：10:30 – 11:50 通常授業、または「談話室」など

2・3限の目的・位置付けは例年の午前の授業に相当し（言語の形式面重視）、4限の通常授業は午後の授業にあたる（総合的な言語運用能力重視）。

そして、オンライン教育環境では不足しがちになる気軽な交流の場、互いに刺激を与え合う場を作って学生の仲間意識を育てるため、1限、および4限の「談話室」を設けた。

### 3-2-1 1限（非同期的授業）

1限は昨年度と同じく、学生間のコミュニケーションを活発にして自律的・共同的な学習を促す目的で設置された、非同期的授業の時間である。ここで言う「非同期的」とは、教員の学生に対する指導が非同期的に行われるという意味である。学生たちは2・3限と同じZoomに集合して同じ時間を共有する<sup>12</sup>。自習と通常授業の中間に位置するような活動と言えるだろう。

学生はクラスメートと相談しながら、教員によって事前に指示された課題を行った。教員は原則として1限の授業に参加せず、この時間に学生が取り組んだ課題に対しては他の時間にフィードバックを行ったが、学生同士の話し合いを見守るなど、同期的に授業に参加する場合もあった。課題の指示とフィードバックは2・3限の授業を担当した教員が行った。課題は例えば文法の小テストや「毎日のスキル<sup>13</sup>」等の練習問題を解く、あるいは他の授業時間内に十分論じ尽くせなかった話題について改めて議論するなど、2・3限の復習または補足的な内容である場合が多かった。

### 3-2-2 水曜・金曜4限「談話室」

4限では、月・火・木曜は通常総合運用の授業を行ったが、水・金曜は「談話室」を実施した。1限は2・3限のクラスごとの活動であるのに対し、「談話室」はその枠を離れた活動である。

昨年度は水曜4限に「クラブ活動」を、そして金曜4限には「寺子屋」を設けていた<sup>14</sup>。これらは、通常の対面体制であれば自然に発生する授業前後の交流や自主的学習の機会をオンライン体制でも実現するべく考案された活動である。しかし水曜4限という、本来授業が行われない時間に教員主導の「クラブ活動」を行なったことで実質的に授業と同等の負担が教員に発生し、研修や教材開発に割くべき貴重な時間と労力が損なわれた。また、逆に教員の関与を減らして学生をほぼ放任した「寺子屋」はオンラインで行う活動として特に有意義なものとは言えなかった。これらの点を踏まえ、今年度はクラスを離れた学生間あるいは学生・教員間の交流の機会を別の形で確保することとした。それが「談話室」

である。

「談話室」では、1日あたり2人から3人の常勤・非常勤教職員がそれぞれのZoomミーティングで40分の「談話テーブル」を開催し、自分の趣味などについて語り、学生と交流した。例えばある水曜日は10:30から11:10まで教員Aが「オンライン・ミュージアム・ツアー」と題して東京国立博物館のオンラインコレクションを紹介し、同じ時間に教員Bが日本語の短歌の鑑賞と創作を学生と共に進めた。そして、11:10から11:50までは教員Cが好きなビデオゲームについて学生と語り合った。また、教材助手が漢字の書き方や部首について解説・指導を行う、1回あたり30分の「ミニ漢字講座」を「談話室」の枠内で開催した。さらに、これらと並行して「Remo談話室」も80分間開設し、学生の自由な雑談の場を確保した。「談話テーブル」「ミニ漢字講座」ならびに「Remo談話室」は、いずれも学生の参加を任意とした。

第3学期は水曜4限に選択Cが開講されたため「談話室」は金曜のみの開催とした。第4学期は全ての曜日の4限に「日本語文法強化クラス」「プロジェクトワーク」「選択C」のいずれかがスケジュールされたため、前段で述べた形の「談話室」は開催しなかったが、「Gather談話室」を設置することでいつでも学生が雑談できる場を確保した<sup>15</sup>。

「談話室」の時間は、教員と学生の個人面談・個人指導の時間、あるいは外部の講師を招いて講演会を開催する時間としても活用された。

### 3-3 クラス編成

オンライン体制ゆえに醸成しにくい学生どうしの親近感をクラス内において育み、そして入学当初の混乱を避けるという目的から、昨年度の第1学期は1限から4限まで同じメンバーそして同じ担任でクラスを編成した<sup>16</sup>。ただ、毎日つねに同じ顔ぶれで学期を通じて授業を行うことには、学生教員ともども閉塞感を覚えないではなかった。

そこで、同様にオンライン体制となった今年度は、親近感の育成と閉塞感の回避を両立させるため、クラス編成について以下の方針をとった。

- 2・3限の文法クラス<sup>17</sup>を年間を通して同じ学生と同じ担任で編成する<sup>18</sup>。
- 学生に科目の選択肢がない「総合運用Ⅰ」「総合運用Ⅱ」では、可能な限り文法クラスと異なるメンバー・教員編成にする。

### 3-4 学生の来日に伴う授業計画の変更

第2学期中の11月初旬、2020年の感染症禍勃発からこのかた渡日を認められてこなかった本センター学生に、にわかに来日の可能性が生まれた<sup>19</sup>。多くの本年度学生がこの機会を利用するべくビザ取得手続きや引っ越しの準備に急ピッチで取り組み、学習に割く時間的・心理的余裕が著しく制限された。教員はこれを受け、予習や宿題の量を減らしたり締め切りを延長したりといった学生の負担軽減措置をとった。また、渡航予定日であった

11月30日と12月1日には当初の予定を大幅に変更して学生に事前準備も事後の宿題も課さない特別な内容の授業を行い、渡航者がやむを得ず欠席しても以後の授業参加に支障を生じないように配慮した<sup>20</sup>。

しかし渡航予定日の直前に、新型コロナウイルスオミクロン株の蔓延に対する懸念から日本政府が外国人の入国禁止を発表し、本センター学生も来日中止を余儀なくされた<sup>21</sup>。最寄りの空港に向かうためすでに自宅を離れている者がいたことなどを鑑み、上述の特別授業は本来の授業に戻すことなくそのまま実施した。渡日を翌日に控えたところでその希望が絶たれた学生の多くは強い心理的混乱と学習意欲の喪失を訴えた。自室を引き払ってしまったため、生活拠点の確保のために新たな手続きや移動が必要となった者もいた。

学生の来日の機会は第3学期中に再び訪れた。外国人の新規入国制限が2月に見直されたことを受け<sup>22</sup>、本センター学生も3月13日、ついに日本入国を果たした<sup>23</sup>。この日は第3学期終了直後の日曜日であり、学生がその後の春休み中に心身を整えた上で最終学期を迎えることができたのは幸いであった。しかし、来日の可能性が2月に再び生まれて以降、学生が前年11月と同様にビザ手続き等渡航準備に追われたのも事実である。このため、今回も同じく課題の軽減や締め切りの延長を行い、また「統合日本語Ⅱ」の枠内で予定されていた第3学期末のミニ発表会を第4学期の冒頭に移動し、学生の負荷低下を図った。

### 3-5 第4学期の対面活動

上述の経緯で学生の日本入国は叶ったものの、依然として少なからぬ数の学生が海外に在住しており、また室内での授業により感染症が蔓延する恐れを払拭するのも困難であったことから、第4学期の授業と卒業発表会の対面実施は断念せざるを得なかった。しかし、せっかく日本にいる学生・教職員が直接交流できるようにするため、そして学生がセンターのキャンパスを少しでも活用できるようにするため、感染症防止対策を取りながら<sup>24</sup>授業以外の形で対面活動を行う機会を設けた。

この限定的な対面活動は、「自由登校」と「校外活動」からなる。

#### 3-5-1 「自由登校」

「自由登校」は授業後の特定の時間（火・金曜 14:00～16:00）にセンターのキャンパスを開放し、そこで他の学生や教職員との歓談、自習、あるいは図書の利用などを認めたものである。ただし、キャンパスの人口密度が高くなることを防ぐため学生を複数のグループに分け、グループごとに登校を許可するスケジュールを組んだ。学生はそれぞれに計5回の登校機会を得た。登校は必須としなかったため、5回の機会に全て登校した者もいれば1度もしなかった者もいる。

### 3-5-2 「校外活動」

「校外活動」は、非常勤講師を含めた教職員がキャンパス外での活動を企画し学生を引率したものである。例年行なっている校外学習と類似のものだが、違いは週末も含めた授業時間外に行われたということ、そして学生の参加が任意だったことである。実施された活動は以下の通り。「大山詣り」「横浜中央図書館に行ってみる」「砂川闘争の地を歩く」「国立国会図書館に行ってみる」「横浜中華街フィールドワーク」「東京日本橋・丸の内地区散策」「横浜地方裁判所傍聴」「高尾山ツアー 霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語」「国会議事堂見学」「国立歴史民俗博物館見学」「横浜中央図書館見学」「東京地方裁判所傍聴」「港の見える丘散策（本町・中華街駅～神奈川近代文学館）」

25

## 4 第1学期の教育内容

月～金曜の2・3限は最初の5週を「文法」に、その後の2週を「待遇表現」にあてた。月・火・木曜の4限は「総合運用Ⅰ」を7週間実施した。水・金曜4限は「談話室」を実施した。「談話室」の内容については3-2-2を参照されたい。

### 4-1 2・3限の内容

#### 4-1-1 文法

入学直後の第1学期2・3限では、中級学習者にとって理解が難しく誤りやすい文法事項を取り上げ、知識を整理し正確さを高めながら運用力を向上させた。本センター作成 *Japanese Grammar*、本センター作成 *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*、『レベルアップ日本語文法 中級』<sup>26</sup>のいずれかを、各クラスの日本語習熟度に応じて使用した。また、クラスによっては敬語とその随伴行動の学習準備として本センター作成「プレ待遇表現（動画スキット全4回）」を導入した。23日間46コマをこの指導にあてた<sup>27</sup>。

#### 4-1-2 待遇表現

円滑な人間関係を構築できるよう、敬語とその随伴行動、社会慣習、礼儀、挨拶などを含めた言語行動を取り上げた。主教材として本センター作成『新待遇表現』を用いた。9日間18コマを指導にあてた。

## 4-2 4限（通常授業）の内容

### 4-2-1 総合運用Ⅰ

月・火・木曜4限の「総合運用」は、主として読解、聴解、発話などの技能面に焦点をあて、文字通り総合的な日本語運用力の向上を目指した。第1学期は身近で日常的な話題を扱った「経験談」という単元から開始し、自然な話し方に慣れるとともに、既習の文法事項などを総合的に活用する機会を提供した。単元の最後には、卒業生が教職員をインタビューしたビデオを参考に学生自身がインタビュー活動を行い、内容について授業で発表を行った。続いて新聞やニュースを教材とする社会性をおびた単元に進み、日本事情や時事的話題に関する語彙・表現の習得と運用力向上を促した。19日間38コマをあてた。

## 5 第2学期の教育内容

月～金曜2・3限に「接続表現」を2週間、その後「統合日本語Ⅰ」を5週間、月・火・木曜4限に「総合運用Ⅱ」を7週間実施した。水・金曜4限には「談話室」を実施した。

### 5-1 2・3限の内容

#### 5-1-1 接続表現

接続詞に注目し、文と文の接続、段落や文章の組み立て方（複段落の作成）について指導した。教材として本センター作成『接続表現』を用いた。10日間20コマをこの指導にあてた。

#### 5-1-2 統合日本語Ⅰ

一般的な中級段階の日本語から、より高度で専門的な日本語への橋渡しをするために、本センター作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を用いた。各課は同一の話題で構成される「文章編」と「会話編」である。「文章編」では読解練習とそこで扱われる文型・語彙・表現を学び、「会話編」では自然な話し言葉を状況に応じて使い分けられるよう指導した。上巻第1～第3課の文章編までを第2学期に扱った。指導には22日間44コマをあてた。このうち12月21日の2・3限はミニ発表会を行い、「統合日本語Ⅰ」で学んだ知識や技能を運用する機会とした。また、3-4で述べた事情により、11月30日は「拡大版談話室」として3名の非常勤講師が「談話テーブル」<sup>28</sup>を開設、12月1日は「テレビ番組鑑賞会」と題してテレビ番組を視聴し、感想を話し合った。

## 5-2 4限（通常授業）の内容

### 5-2-1 総合運用Ⅱ

月・火・木曜4限の「総合運用Ⅱ」では、現代社会の問題をめぐる生の教材、例えば新聞・雑誌記事や報道番組などを読解・聴解し、話し合いを重ねることによって、類似した一般的な話題についても日本人と話し合える能力の獲得を目指した。教材は、話題シラバスのモジュール型教材群「外国人と国籍」「文化の発信」「ものづくり」「教育」「現代の若者たち」「働き方」「地球環境」「差別と人権」「情報化社会」の中から学生の興味や関心あるいは必要性に応じて各クラスごとに選び、授業進度も各クラスの理解度に合わせて調整した。ただし、「外国人と国籍」に関しては全クラス必修とした。19日間38コマを指導にあてた。また、3-4で述べた事情により、11月30日は「拡大版談話室」を2・3限に引き続いて実施した。

## 6 第3学期の授業内容

冬休みが明けた1月から第3学期が始まり、各学生の専門・興味・関心・必要性に応じた選択授業が増える。

2・3限は月・水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木・金曜に「統合日本語Ⅱ」を実施した。4限は月・火・木曜に「総合運用Ⅲ」、水曜に随意科目の「選択C」、金曜に「談話室」を実施した。

### 6-1 2・3限の内容

#### 6-1-1 統合日本語Ⅱ

第3学期に全学生が共通の教材で学ぶ授業はこの「統合日本語Ⅱ」のみである。本センター作成『統合日本語 Integrated Japanese Advanced Course』を教材に、上巻の第3課会話編、下巻第4・第5課文章編を扱った。木・金曜の週2日、計15日間30コマ実施した。例年最終週の2日間はミニ発表会を行うが、今年度は3-4で述べた事情により第4学期冒頭に開催を延期した。

#### 6-1-2 選択A

自分の専門領域に関連するコースを1つ選び、将来の学術研究や専門実務に資する言語面の能力育成に取り組む科目である。学生には第3・第4学期を通じて同じコースを継続履修するよう奨励した。コース選択に迷う学生のため、第2学期中の11月19日4限に各コースの説明と質問受付の機会を設けた。本年度は「文化人類学」「政治」「文学」「歴

史学」「法律」「日本学概論」の6コースを開設した。月・水曜、計15日間30コマ実施した。

#### ・文化人類学

受講生の専門、関心を考慮し、第3学期は「フィールドワーク」「植民地とネイティブ」「グローバル化」「ジェンダー」「日本人論」というテーマを設定し、具体的な事象から抽象的課題に至る専門性の高い読み物を教材とした。例年は横浜の街を歩いて写真を撮ってきて報告する写真観察法を実施しているが、コロナ禍により各学生が異なる地域に居住していたため、世界の様々な街の様子が報告された。第4学期は各学生が自己のテーマにそった素材を提供し話し合いを進めた。「テクノロジー」「イメージの人類学」「ポストヒューマン」「ジェンダー」「民族音楽」「四国遍路」「役割語」「レトロツーリズム」等がテーマとしてあげられた。

#### ・政治

大学生向けの教科書を読み、第3学期は日本政治、第4学期は国際政治や日本外交に関する理解を深めた。授業では読み物の内容確認や、学生から出された話題を中心に議論を行った。また、学生が自分で選んだニュースを発表し、議論を進める時間を設けた。第4学期にはオンラインで田園調布学園大学の学生との交流会を実施し、日米の政治に関する話題について意見交換を行った。

#### ・文学

明治から現代までの短編小説および関連する評論を取り上げ、様々な観点から作品を分析し、話し合いを行った。おおむね2~3回の授業で1作品を読んだ。

#### ・歴史学

日本語で歴史研究を進めていくための基礎訓練を積み重ね、語彙・表現の拡充を図った。第3学期から第4学期前半は学生の興味・関心・必要性に応じて、専門書および一次史料を素材とする読解練習を行った。第4学期後半は、各学生が自分の研究テーマに関する資料を選び、2時間の授業を構成する取り組みを行った。また、明治大学文学部助教伊勢弘志氏をお招きして、資料・史料の探し方や日本の歴史学界事情等についてお話しいただいた。例年授業の一環として行っている横浜中央図書館、及び国会図書館の見学は、本年度は自由参加の「校外活動」の枠で実施した。

#### ・法律

憲法、民法を中心に、刑法、知財法、会社法の一部を取り上げ、条文・判例を自力で理

解できる技能を育成することで、法律に関わる話題について自ら調べ、それを説明し、自説を展開できるよう指導した。

#### ・日本学概論

専門が定まっていない学生、幅広い分野で活かせる日本語力を追及したい学生などを対象に設けられた選択科目である。選択Aの専門分野を中心に日本研究や日本についての多種多様な教材を用い、知識を蓄え、理解を深めたのち、互いに話し合うことで日本語力の定着を図った。

### 6-1-3 選択B

選択Bでは必要とされる、あるいは弱点と思われる日本語力の増強のために、「話す」「聴く」「読む」「職場の日本語」の4コースを開講した。火曜の計8日間16コマをあてた。

#### ・話す

「話す」コースは第3学期と第4学期に行われた。議論を中心に行ったクラス、日常会話を中心に行ったクラス、日常的な会話表現の習得を中心に行ったクラスがあった。イントネーション指導や聴解、議論に使う表現なども行った。

#### ・聴く

ニュースやドキュメンタリー番組を繰り返し聴き、協働でスクリプトを作成しながら細部まで正確に聴き取ることを目指すクラスと、10分間の解説番組を視聴し、聴き取ったことをもとに質問、確認、再生、まとめ、意見交換などを行いながら理解を深めることを目指すクラスに分けて実施した。

#### ・読む

300～400字程度の短めの文章（毎回3～4編程度）を素材として、そこに書いてある内容を詳しく正確に読み取る練習を積み重ねた。授業では、一文一文の正確な理解から、文と文の関係の理解へと進んだ。また、理解を深める目的で、音読の活動も積極的に取り入れた。

#### ・職場の日本語

ビジネス場面での待遇表現の位置づけで、さまざまな状況における会話練習を行った。また、ビジネス上のコミュニケーション問題の事例を読み、問題の所在、解決方法について考え、ディスカッションを行った。

## 6-2 4限（通常授業）の内容

月・火・木曜4限は「総合運用Ⅲ」とし、「現代史」「大衆文化」「ビジネス社会」の3つの中から1コースを選択する。いずれのコースも記事の読解、ビデオの視聴、そしてその内容についての討論などの活動が盛り込まれている。計19日間38コマ実施した。2月21日には日本で活躍する卒業生を招き、全学生を対象としてトークショーを開催した<sup>29</sup>。

### 6-2-1 総合運用Ⅲ

#### ・現代史

ムービーフィルムが残されている1900年前後からの日本の近現代史を、「戦前の日本1900-45」「敗戦と復興1945-55」「高度成長1955-70」「現代の日本1970-95」の4期に分け、ビデオと読み物で概観した。最終週には、学生各自が1995年以降の日本社会について、関心を持つ話題を選んで発表した。

#### ・大衆文化

広い意味での日本の「大衆文化」に関して、日本人と話せるようになることを目標とした。「CM」「マンガと教育」「映画とオタク」「言葉と音楽」という各テーマで資料を読み、映像を見て話し合った。各テーマの最後には学生が発表する活動を設け、理解を深めた。コースでの学びを統合する目的で、コースの最後は、「これって文化？」というテーマで学生各自が「文化」と思う事象をとりあげ発表した。

#### ・ビジネス社会

バブル経済の前後における企業や政府、さらに社会や人々の暮らしの変化を、戦後史にも触れながら追っていった。「創業者と起業家」「アベノミクス」「SDGs」「EV（電気自動車）」「DX（デジタルトランスフォーメーション）」などの話題を取り上げた。また、NHKNEWSおはよう日本の「おはBiz」から、毎回一人ずつ学生が興味を持った記事を紹介し、話し合いを行った。

### 6-2-2 選択C

第3・第4学期には随意選択科目として「文語文法」「漢文」「ビジネス」の3コースを開設し、水曜4限に実施した。「ビジネス」は外部から招いた専門家が指導に当たった。

#### ・文語文法

文語文法の用語や歴史的仮名遣いから導入し、動詞・形容詞・助動詞の指導に進み、文

語作品の部分的読解も並行して行った。

#### ・漢文

日本人が書いた漢文や漢文体の素材を取り上げ、読み下しと解釈の練習を行った。まず漢文の基礎構文をおさえ、それを応用して短い文章を読んだ<sup>30</sup>。

#### ・ビジネス

「日本の産業と金融」を主題に、新聞や雑誌の記事を素材として、ビジネス界の実情にも触れながら、日本経済の現在に至る経緯を紹介し、今後の展望と課題について講義した。元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が指導に当たった。

### 7 第4学期の教育内容

プログラム最終第4学期の2・3限は、第3学期2・3限と同様の形態をとる。「選択A」は同じコースを3学期から継続履修するが、「選択B」は「話す」のみコースの選択肢として継続し、「書く」「就活の日本語」「現代小説」「日本文化論」を加えた。月・水曜に「選択A」、火曜に「選択B」、木・金曜に「統合日本語Ⅲ」を実施した。

4限は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語文法強化クラス」のいずれか1つの形態を選択し、学習を進めた。プロジェクトワークは各選択者ごとに担当教員と相談の上で任意の時間に週1コマ(50分)実施した。「日本語文法強化クラス」は月・木曜の4限に実施した。随意科目である「選択C」は第3学期と同じコースが用意され、第3学期と同じく水曜に開講した。

#### 7-1 2・3限の内容

##### 7-1-1 統合日本語Ⅲ

木・金曜に実施した「統合日本語Ⅲ」では、日本語の主に形式面の補強・拡充・総仕上げを目指した。学生の到達度、興味、要望に応じて各クラスでそれぞれに教材を選択し、内容に関連した発話活動などを通じて既習事項を総ざらいし、日本語の知識をより確実なものにするとともに、上級日本語話者が知っておくべき事項の欠落を補うなどした。16日間32コマをあてた。最初の週の2日間は本来第3学期末に行われるはずだったミニ発表会を行い、「統合日本語Ⅱ」で学んだ知識や技能を運用する機会とした。

##### 7-1-2 選択A

第3学期と同じコースを継続履修する。16日間32コマをあてた。各コースの内容については6-1-2を参照されたい。

### 7-1-3 選択B

第4学期の火曜は、「話す」「書く」「就活の日本語」「日本文化論」「現代小説」の計5コースを開設した。第3学期同様日本語力の増強を図ることも可能であるし、また、まとまった内容のものを読むという目的で「日本文化論」「現代小説」を選択することもできる。8日間16コマをあてた。（「話す」コースについては6-1-3参照）。

#### ・書く

随筆から小論文まで、幅広い分野の文章表現力の習得を目的とした。毎週、宿題として400字程度の文章を書き、授業ではそれを学生間で検討・批評した。また、文章の推敲を目的とした教材を用いて毎週異なる視点から、日本語の文章技術について学んだ。

#### ・就活の日本語

就職活動を考えている学生を対象とし、オンライン面接の練習、メールの課題提出などを通して、事例に即した解説を加えながら実践指導をした。また、元神奈川経済同友会の湧井敏雄氏が面接官となり、模擬就職面接を行った。（6-2-2「選択Cビジネス」参照）

#### ・日本文化論

青木保著『日本文化論の変容』を素材とし、戦後の日本人論について読解した上で、各学生にその時代を命名させ、話し合いをした。また、本文で著者が引用した文献を追加資料として配付し、十分な内容理解を目指した。

#### ・現代小説

現代作家による短編あるいは中編小説を読み、論じた。授業では予習を踏まえて学生間の議論を促し、作品の「読み」を相互に深めあった。教材として、村上春樹、向田邦子、江戸川乱歩、宮部みゆき、本谷有希子、川上弘美、小川洋子の作品を扱った。1作品につき短編は1回、中編は2回の授業を費やした。

### 7-2 4限の内容

第4学期の4限は「プロジェクトワーク」「グループ学習」「日本語文法強化クラス」のいずれかの学習形態を選択して学習を進めた。また第3学期と同様、随意選択科目である「選択C」を開講した。選択Cについては6-2-2を参照されたい。

#### ・プロジェクトワーク

プロジェクトワークでは、各学生が個人またはグループで自己の専門や興味ある分野の主題を選び、その内容に比較的詳しい教員から個別の助言を受けながら、調査研究や文献

の読解などを行う。今年度は28名の学生が選択し、うち2名が1つのグループを結成した。テーマに関しては卒業発表会の内容と重なる部分が多いので、そちらを参照されたい(8卒業発表会を参照)。学生1人につき週1日、計8コマ(1コマ50分)を指導にあてた。

#### ・グループ学習

特定の日本語課題に対して関心を同じくする者が、2~3名程度のグループを構成し学習する。今年度は選択者は存在しなかった。

#### ・日本語文法強化クラス

日本語能力試験N1・N2レベルの文法習得を目指して、1回2コマのクラス授業を週に2日、計16日間32コマ行った。市販の問題集を使用して知識の整理、増強を図り、語彙クイズ、文型復習クイズも行った。

## 8 卒業発表会

卒業発表会は10カ月間にわたる学習の集大成となる催しであり、年度の最終週に举行される。学生は質疑応答を含め1人15分の持ち時間内で、改まった形式の発表をする。例年はすべての学生と教職員そして来賓が一同に会して開催されるが、今年度も昨年度と同じくZoomを用いたオンライン開催となり、学生を3セッションに分け2日間にわたって実施した。

第4学期の4限にプロジェクトワークを選択した学生は、その時間内に卒業発表の準備を進めた。「日本語文法強化クラス」の学生はミニ発表会などの機会に話した内容を洗練させるなどして卒業発表に仕上げた。発表準備にあたっては学生一人ひとりに割り当てられた担当教員が原稿のチェックを行い、発表の予行演習を指導した(学生1人あたり2コマ分をあてた)。

本センターのウェブサイトにある[「卒業発表会内容紹介」ページ](#)では、過去の年度も含め、題目と要旨を公開しているので参照されたい。

## 9 通年で実施した学習指導と行事など

### 9-1 評価

#### 9-1-1 テスト

本コースでの学習成果を測定するため、入学直後と卒業時に実力試験を実施した。文法、

読解、聴解、漢字の試験、そして面接形式での発話テストを入学時と卒業時に共通して実施し、入学時にのみ作文のテストを加えた。

昨年度の卒業時と同じく、筆記テストは Google Forms と Quilgo を用いて非同期的に実施し、発話テストは Zoom を用いて実施した。入学時の作文テストでは Zoom ミーティングに全学生を集合させ、辞書の利用を認めて 1 時間以内にその場で作文させた。紙に手書きでさせるのではなく、Google ドキュメントにタイプして提出させた。

### 9-1-2 個人面談

本センターでは入学時の実力試験結果をもとに第 1 学期のクラスを編成するが、コース開始に先立ち、2・3 限（文法の授業）のクラス担任教師が自分の受け持つ学生と個別に面談し、試験の結果を踏まえて 40 週にわたる学習の指針などを助言した。学期末にも担任と学生とが個別に面談し、その間の学習ぶりを振り返り、新たな課題を設定するなどした。

文法のクラス担任と学生の個人面談の機会はその後も各学期末に設け、最終学期にあたる第 4 学期には 10 ヶ月の学習を振り返った。

## 9-2 漢字学習プログラム SKIP

プログラム期間を通じて、常用漢字習得のための自律学習プログラム SKIP (Special Kanji Intensive Program) を実施している。学生は常用漢字すべてを卒業までに習得できるよう毎日教材を独習し、授業以外の時間にクイズ全 156 回を受けることとなっている。教材には本センター編集発行の市販教材で、漢字を単独ではなく熟語や例文と共に学習できるように構成された [Kanji in Context](#) ならびにそのワークブック [Kanji in Context Workbook vol. 1・2](#) (ジャパントイムズ社) と、それらを Web アプリケーション化した「[WebKIC](#)」を用いた<sup>31</sup>。

そして、学習を促すために「KIC 統一試験」を作成し、実施した<sup>32</sup>。統一試験は、漢字の書き方、読み方等を答えるという問題 100 問を全学生が受け、点数が 6 割未満の場合は再試験を受けなければならない。各学期に 1~2 回、計 7 回実施した。例年、統一試験は「総合運用」（第 1~第 3 学期）あるいは「統合日本語Ⅲ」（第 4 学期）の授業時間内に行っているが、今年度は Google Classroom 上で非同期的に行った。

クイズあるいは統一試験を受ける際、学生は白紙あるいは自分で印刷した問題用紙に答案を記入し、それをスキャンするかあるいはスマートフォン等で撮影するかして PDF に変換し、提出した。iPad + Apple ペンシルなどの手書き入力デバイスを使い、問題用紙の PDF ファイルに直接答案を書き込んで提出する学生もいた。

また、3-2-2 でも触れたが、第 1 学期から第 3 学期まで本センター教材助手が「談話室」の時間に 30 分間の「ミニ漢字講座」を Zoom で開設し、漢字の書き方の指導や部首の解説を行った。

### 9-3 講演会など、各種の企画や催し

#### 9-3-1 全学生あるいは希望者が対象のもの

全学生を対象とする講演会を5回（10月5日、11月12日、11月17日、12月3日、2月21日）、希望者を対象とする講演会・交流会・ワークショップを3回（1月21日、3月25日、4月15日）、いずれもZoomで開催した。各種の催しは実施順に本稿末の資料に一覧としてまとめた。この表には、本センターが主催した行事だけでなく、相手方の団体から招待を受けて本センターが学生に参加を呼びかけた催事（「校外活動」<sup>33</sup>として実施したものを含む）も記載した。

以上の催し以外に、希望学生を対象とした課外活動「古筆クラブ」を設けた。書家の小林紘子氏が指導を担当し、手書きの古典文献を理解するのに欠かせない「くずし字」の読解練習を段階的に進めた。第3・第4学期の毎週金曜日にZoomを用いて実施された。

#### 9-3-2 日本財団フェロープログラム関連行事

日本財団のご厚意により実施している日本財団フェロープログラム<sup>34</sup>では、レギュラーコースの授業と活動に加えていくつかの催しを行っている。今年度は本センター卒業生による講演会（11月17日）を設け、フェローによる特別発表会を前期（1月26日・2月2日）と後期（5月18日・25日）の2度に分けて開催した。

## 10 おわりに

今年度の日本研究センターレギュラーコースは、教員がオンライン授業に習熟したことにより安定した教育が提供できたことに加え、年度の終盤においてながら学生が来日を果たせたこともあり、昨年度より学生の経験は充実していたかもしれない。また卒業発表会では例年と遜色ないレベルの日本語が披露されており、それは10ヶ月の教育が成果を上げた証左に見える。一方で、渡日にあたっての混乱と疲弊、それに伴う学習意欲と集中力の喪失、そしてようやく日本に来てもお授業がオンラインのままであった落胆は、重く苦い経験として学生の心に刻まれたに違いない。

年度末に実施した学生アンケートでは、Google クラスルームの使い方についての提言（例：教員によって作り方・使い方が大きく異なるので統一してほしい）など建設的な意見が得られたが、本コースへの全体的な満足度を“excellent”とした学生の割合は例年に比べてやや少ない。今年度新設した「談話室」については、参加した学生からのコメントは好意的であり熱心な参加者も数名いた反面、多くの学生は時差のせいで、あるいは授業と課題とで力尽きてしまい、残念ながら参加する気になれなかったと述べている。第4学期に設けた対面活動の機会についても、1割強の学生が頻繁に参加したと回答したが、全く

参加しなかった、あるいはほとんど参加しなかった学生が約6割を占めている。そして、もっと参加したかったものの余裕がなかったというコメントがやはり多い。

朝に Zoom で卒業式が行われた6月10日の午後、本センターが入居するパシフィコ横浜の東縁をなす臨港パークの南口広場で卒業証書授与式が開催された。参加は任意であったにも関わらず日本在住のほぼ全ての学生が駆けつけ、センター所長が一人一人に pdf ではない卒業証書を手渡した。学生と教職員が一つ所に集まったのは2019年秋のレギュラーコース入学式以来である。Zoom の授業では毎日顔を合わせていたが、現実では目にしたことさえなかった学生に対し口をついて出たのは「はじめまして」という挨拶だった。久しぶりに本物のカメラで撮影した集合写真には、晴天に誘われたような一同の明るい表情が記録されている。その写真を、そして残念ながらやむをえない事情で来日が叶わなかった学生の Zoom 映像を眺めつつ、この何とも結論をつけがたい10ヶ月の経験が全ての学生にとって将来の糧となることを願ってやまない。

(あきざわ ともたろう/IUC レギュラーコース言語課程主任)

## 注

- 1 オンライン体制となった昨年度と今年度は、世界各所から授業に参加する学生の時差を考慮して日本時間の午前中に1日の全ての授業が終わるスケジュールを組み、通常の午前の授業に相当するものを「1限」～「3限」、そして午後の授業に相当するものを「4限」と称した。詳しい授業スケジュールについては、次項の「2021-2022年度40週間のレギュラーコース日程」冒頭および3-2を参照のこと。
- 2 <https://zoom.us/>
- 3 [https://www.google.com/intl/ja\\_jp/forms/about/](https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/)
- 4 <https://quilgo.com/>
- 5 <https://remo.co/>
- 6 <https://gather.town/>  
「教員室」は第3学期より、「談話室」は第4学期より、それぞれプラットフォームを Remo から Gather に切り替えた。
- 7 <https://edu.google.com/intl/ja/products/classroom/>  
LMS には Google Classroom 以外にも Moodle などの優れたシステムが存在するが、本センターは従来より [Google Workspace for Education](https://workspace.google.com/ja/products/education/) を全面的に活用しており、それと最も相性が良いシステムとして Google Classroom を採用している。
- 8 例年の校外学習のような機会を提供できればという思いから、「連絡掲示板」にはオンラインで参加できる各種イベントの情報も随時掲示した。

- 9 例えば、全学生を8つのクラスに分けて授業を行った第1学期の「文法・待遇表現」ではそれぞれのために計8つのクラスルームが設置された。一方、第3・第4学期選択Aの「法律」は1クラスだったため1つのクラスルームを設置した。
- 10 <https://slack.com/>
- 11 <https://web.stanford.edu/dept/IUC/cgi-bin/index.php>
- 12 学生はクラスごとに分かれる場合が多かったが、第4学期「話す」など、科目によっては複数クラスの学生が同一のZoomミーティングに参加する場合もあった。
- 13 「毎日のスキル」は、日本語能力試験の過去の読解問題やその対策問題を中心とした小テストを解かせ、読解力の向上を図るものである。
- 14 詳細は[秋澤 \(2021\) 3-2-2](#)を参照のこと。
- 15 GatherはRemoと異なり、時間的制約のない談話スペースを開設することができる。
- 16 詳細は[秋澤 \(2021\) 3-3](#)を参照。
- 17 第1学期は「文法・待遇表現」、第2学期は「接続表現・統合日本語Ⅰ」、第3学期は「統合日本語Ⅱ」、第4学期は「統合日本語Ⅲ」。
- 18 ただし、第3学期から1名の学生がクラスを移動した。
- 19 [外務省発表「水際対策強化に係る新たな措置 \(19\)」](#)の「2. 外国人の新規入国制限の見直し」を参照のこと。
- 20 特別授業の具体的な内容は5-1-2を参照のこと。
- 21 [外務省発表「水際対策強化に係る新たな措置 \(20\)」](#)の「2. 外国人の新規入国停止」を参照のこと。
- 22 [外務省発表「水際対策強化に係る新たな措置 \(27\)」](#)の「4. 外国人の新規入国制限の見直し」を参照のこと。
- 23 今年度の学生51名のうち、この時に31名が来日し、7名がそれぞれの事情で来日を断念した。残りの13名はすでに日本在住であった。
- 24 学生と教職員は毎週PCR検査を受け、結果が陰性だったもののみが翌週の対面活動に参加できた。また、PCR検査の結果に関わらず、体調が悪い者はその日の活動に参加しなかった。キャンパスには検温と手指消毒のための設備を用意した。
- 25 これらの活動のうち、「大山詣り」ならびに「高尾山ツアー 霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語」は株式会社東急ホテルズの企画によるものである。
- 26 許明子・宮崎恵子、くろしお出版、2013年。
- 27 1コマあたりの授業時間については3-2を参照のこと。
- 28 3-2-2で述べた「談話テーブル」と同じ要領である。
- 29 稿末の資料（通常授業以外の各種イベント）を参照のこと。
- 30 オンライン化に伴い、学生の側からアクセス可能な辞書がばらばらとなり、辞書の使用法指導が徹底できなかった。

- 31 例年は書籍を全学生に購入させているが、今年度は希望者が各自で購入するよう推奨した。
- 32 作成には、WebKIC のテスト作成機能を用いている。
- 33 3-5-2 参照。
- 34 [https://iucjapan.org/html/curri\\_regular\\_j.html](https://iucjapan.org/html/curri_regular_j.html)

### 参考文献

- 秋澤委太郎 (2021) 「2020-21 年度レギュラーコースカリキュラム報告—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第10号 pp.48-68  
<[https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021\\_Akizawa.pdf](https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Akizawa.pdf)>
- 大竹弘子 (2022) 「2022 年度漢文夏期集中コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第11号 pp.93-96  
<[https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022\\_Otake.pdf](https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022_Otake.pdf)>
- 橋本佳子・佐藤有理・加藤陽子・川西由美子・河野多佳子・後藤恵利・城佳子・本間光徳 (2022) 「2022 年度夏期コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第11号 pp.72-92  
<[https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022\\_Hashimoto\\_et\\_al.pdf](https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022_Hashimoto_et_al.pdf)>

【資料】2021-22年度 通常授業以外の各種イベント  
 (特に指定のないものはZoomによるオンライン開催)

2021年

- 10月8日(金) 谷澤寿和氏、ニコラス・ミューズ氏(横浜市米州事務所)  
 「都市とグローバル化—横浜市を事例に—」
- 11月12日(金) 河村晴久氏(観世流能楽師)講演会
- 11月17日(水) IUCレクチャー・シリーズ  
 ロバート・ヘリヤー氏(ウェイクフォレスト大学歴史学科准教授)  
 「ミルク&砂糖入りの緑茶—日本がアメリカのカップを満たした時代—」
- 12月3日(金) 中村梅彌氏・中村梅氏(日本舞踊中村流)講演会

2022年

- 1月21日(金) アレクセイ・クラル氏(Foreign Service Institute Yokohama 所長)  
 との交流会
- 1月26日(水) 日本財団奨学金受給生前期特別発表会
- 2月2日(水) 同上
- 2月21日(月) ジェイ・アラバスター氏(2004-05年度卒業生)  
 映画『おクジラさま』トークショー
- 3月15日(火) 「カケハシ・プロジェクト」  
 日本語弁論大会優秀者・神奈川大学学生とのオンライン交流会
- 4月15日(金) 吉田都氏(バレリーナ・新国立劇場舞踊芸術監督)  
 センター所長ブルース・バートンとの対談
- 4月24日(日) 「大山詣り」  
 (株式会社東急ホテルズ主催、「校外活動」として実施)
- 5月15日(日) 「高尾山ツアー 霊気満山 高尾山 ~人々の祈りが紡ぐ桑都物語」  
 (株式会社東急ホテルズ主催、「校外活動」として実施)
- 5月18日(水) 日本財団奨学金受給生後期特別発表会
- 5月21日(日) 国立歴史民俗博物館 レクチャー+見学  
 (「校外活動」として実施)
- 5月25日(水) 日本財団奨学金受給生後期特別発表会